



Title	貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論
Author(s)	緒川, 弘孝
Description	付属資料 (1)
Relation	コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～ = Case Studies of Community-Based Tourism : Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community
Citation	CATS 叢書, 3, 189-201
Issue Date	2010-02-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42687
Rights	© 2010 緒川弘孝
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATSLibrary03_189-201.pdf



(1) 貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論

緒川弘孝

○はじめに

中国・貴州省は、省政府や州政府の支援のもと、ミャオ族やトン族などの少数民族が実際に生活する村が観光開放され、住民が意見を出しながら、労力や資材の提供などを通じて積極的に参加する観光開発が行われている。今回、我々は視察旅行を通じて、成功例と言われる郎徳上寨村をはじめ、そうした観光開発が行われているいくつかの村を巡り、「少数民族による持続可能な自立開発型の観光開発が行われてきた」[曾：1998.3、1998.4] 経緯や状況などについて関係者からヒアリングを行って、実際にその成功の様子を確認できた。ただし、それぞれの観光地の様子を観察して見ると、観光地化の進展の度合いが様々に異なり、その成功の要因や直面する課題についても、各地で異なっているように見受けられた。また、貴州省内には、自立開発型とは異なる形での開発が行われている観光地も存在する。そこで、近年、議論されている観光地のライフサイクル・モデルを用いて貴州省の各観光地の位置づけを整理しながら、観光地を構成する魅力ごとに各観光地の成功要因と課題を分析することとする。

○観光地のライフサイクル

観光地のライフサイクル論の歴史については、「観光地発展段階論の系譜」[石井：2002] に詳説されているので、ここでは詳細は避けるが、1950年代から観光地の盛衰に関する議論が始まり、現在では、1980年、R・W・バトラーの論文「観光地の発展周期に関する考察：観光資源管理のための一視点」において発表された観光地のライフサイクル論をベースに議論されることが多い。バトラーは、旅行者の特性や観光地の空間整備などに関連付けて、観光地が①探検段階、②参画段階、③発展段階、④確立段階、⑤停滞段階、⑥衰退または再生段階の6段階を経て発展・進行していくと論じ、人気の増加と衰退を単純な曲線を用いて説明している[Butler：1980]。バトラーは、それまで考えられていたように観光地が無制限に右肩上がりの発展を続けることはあり得ず、観光魅力の質は、意識を持った対策なしには、徐々に悪化するという視点を提示した。

その後、バトラーの論文に言及した研究者たちの多くが指摘しているように、すべての観光地の観光客数の推移が必ずしもこの曲線と同じようなカーブを示すわけではない[Kovács：1997]。また、すべての観光地が必ずこの6つの段階を経験するわけではなく、計画的な開発から始まった観光地であれば、①探検段階や②参画段階を飛ばして③発展段階から始まると考えられるし、観光客を引き寄せる魅力に欠けるために③発展段階や④確立段階を経ることなく、⑥衰退段階を迎える観光地も存在すると考えられ

る。各発達段階の境界の定義も曖昧であり、ある観光地が単純に特定の発達段階に位置づけられるよりも、同時に複数の発達段階の特徴を持つことの方が多いとも思われる。つまり、バトラーの観光地のライフサイクル・モデルやその発達段階論は、そのままの形ですべての観光地に適用できるとは考えられない。しかし、観光地の成功要因や課題は、発達段階ごとに異なった様相を持っていると思われ、発達段階を無視して一括して考える弊害よりも、それぞれの発展段階ごとに整理して考える意義の方が大きいと考えられる。

そうした考えのもと、まずは観光地のライフサイクルの各発達段階をバトラーの論文から整理し、観光地発展の曲線と併せて表現し（図 1）、次に観光地の魅力を構成する要素が、観光地のライフサイクルに及ぼす一般的な傾向を検討し、資源、インフラ、市場条件、外的要因の要素ごとに整理した（表 1）。こうした整理に基づいて、観光魅力の要素ごとに貴州省の各観光地を概観していくこととする。

○自然資源

今回の視察旅行では、主として少数民族文化を観光資源とする地域を巡り、自然資源を主とする観光地は、東洋一と称される黄果樹瀑布および巨大な鍾乳洞である龍宮のみを訪れたため、貴州省の自然資源の状況について全体像は掴みにくい。黄果樹瀑布に関しては、滝の周辺が地元政府が管理する有料入場のエリアとなっており、滝へとアプローチする片道徒歩30分以上の道のりの山道は一定以上荒れないように舗道が整備され、土産物屋も出口付近に集められるなど、自然景観が損なわれないような配慮がなされているように見受けられた。そのため、今後、この自然資源の魅力が大きく損なわれるとは考えられない。現在は、観光地のライフサイクル曲線上で言えば、地方政府の開発と宣伝・広告により、急速に観光客数が増加している「発展段階」にあると思われるが、今後は、“東洋一”という看板もあることから、バトラーが永続的な魅力を持つ観光地として挙げたナイアガラのように、確立段階、停滞段階、再生段階と進んでいくものと思われる。龍宮鍾乳洞についても、観光化により鍾乳石が若干、黒ずんで来てはいるが、同様の傾向を示すものと思われる。

○インフラ

前述の黄果樹瀑布や龍宮鍾乳洞は、貴州省内の高速道路の延伸により明らかに観光客数が増加しており、インフラ整備による観光客数の増加効果は明らかである。それらに対して少数民族観光地の多くは山間部にあり、従来、道路の整備状況は悪く、路面状態も劣悪だったが、ここ数年のうちにようやく道路が舗装化されつつある。少数民族観光の中心となっている黔东南苗族侗族自治州内の黎平には、近年、小規模な空港も整備された。貴州省全体として見ても、隣接する四川省、雲南省、広西チワン族自治区といった有名観光地を要する地域との間で高速道路などの整備が進行中であり、インフラ整備

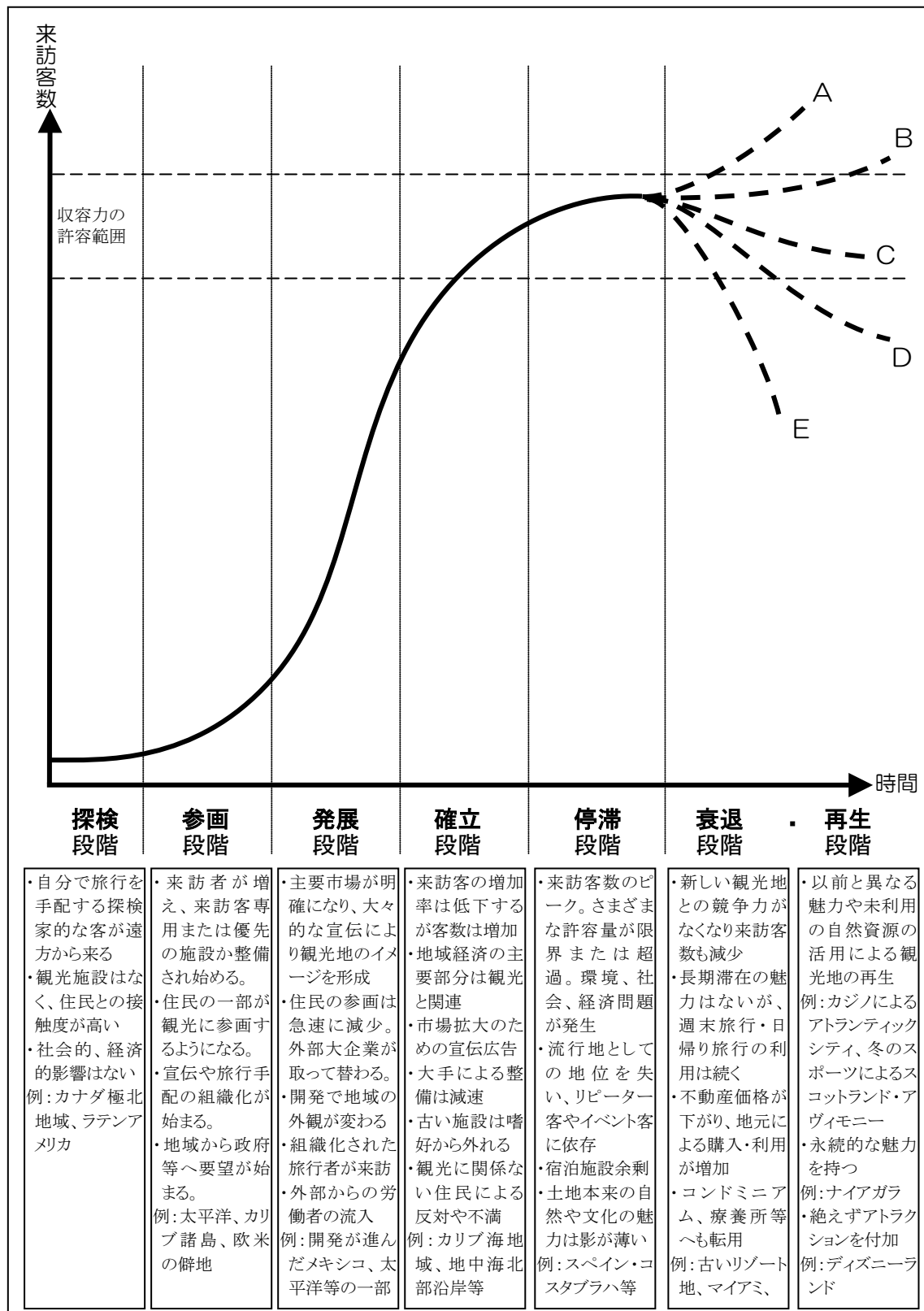
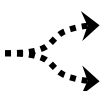
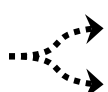


図1 観光地のライフサイクル

(出所) Butler, R.W. (1980) The concept of tourism area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer* 24 (1)等をベースに筆者作成。

表1 観光地の魅力を構成する要素が観光地のライフサイクルに及ぼす一般的傾向

魅力の要素		一般的傾向	
資源	自然資源		インフラや観光施設の整備が進み、交通量や観光客数が増加するとともに自然環境が汚染、損耗、または破壊され、自然資源の価値は失われる方向に向かう。
	観光施設		増加する観光客を予想または対応するために観光施設が増加し、観光地のメニューも多様化する。ただし必ずしも質的な向上が伴うとは限らない。
	景観		急速な近代化や乱開発で地域の自然景観や伝統的な景観が失われることが多いが、一方で観光地化を契機に景観規制や町並み整備が行われることもある。
	文化資源		観光地化に伴い地域が近代化したり俗化することで伝統的な文化が失われることも多いが、一方で観光地化が保存・伝承の契機となることもある。
	特産品 (地場産業)		観光産業への依存度によっては、旧来の地場産業が廃れることもあるが、共存したり、観光産業と結びついて需要を増やしたりブランド形成が図られる場合もある。
	ホスピタリティ		初期においては旅行者に対する慣れがでてきて心を開いたり、対応するスキルを身につけることによってホスピタリティが向上することがあるが、観光地化が進展するにつれて、ホスト側にルーチン作業的な意識が出てきたり商業主義的な意識が強まるなどして、ホスピタリティが減少する傾向がある。
インフラ	交通インフラ ・宿泊施設		観光客数増加への対応または観光地計画により、道路、鉄道、空港、港湾等の交通インフラや各種の宿泊施設などの整備が進む。
市場条件	認知度 ・ブランド力		観光客数のより一層の増加を図るため、市場への広告・宣伝量が増加し、市場での認知度が高まる。それはやがて地域のブランド力にもなり、定番的観光地として一般的な消費者も惹きつけるようになる。
	市場トレンド・競合地 ／連携地	?	観光客数が増えるようになると、より遠くの観光地と競合するようになり、近くの観光地との連携も必要になってくるということが言えるが、地理的条件、観光地の種類や規模、市場のトレンドなどの要素が複雑に絡むので、観光地の発展段階との関係は明確ではない。
外的要因	その他	?	災害、伝染病、戦争、テロ、治安悪化、景気、為替相場、制度や法令の変化などの観光の外的要因も観光地の衰退に影響するが、観光地の発展段階との直接的な関係は明確ではない。
(地域調和)			初期においては地域が広く認識されて地域へのプライドが醸成されたり、経済的恩恵が得られる効果などにより、地域が一体感を持って観光開発に取り組むことも多いが、観光地化が進展するにつれて、交通渋滞、ゴミやトイレの問題などの地域負荷が高まり、地域住民と旅行者、あるいは観光受益者とそれ以外の者、地元資本と外部資本などの間で利害が対立するようになる。また産業構造の変化により、地域住民内での格差も生じ、観光に対する温度差が生じる。こうした地域不調和の要素が、ホスピタリティにも影響する。

による観光客数の押し上げ効果は今後大きいと思われ、「発展段階」の状態が今後長く持続する可能性もある。

○宿泊施設

貴州省の省都である貴陽市や黔東南苗族侗族自治州の州都凱里市では、近代的な高級ホテルをはじめ様々な宿泊施設が数多く整備されており、従来の少数民族居住地目当ての外国人のバックパッカー的な観光客だけでなく、国内の家族連れやツアー団体客に至るまで大きく観光客の層を広げる役割を果たしている。また、外国人バックパッカーが数多く集まる観光地として有名な山間地のトン族の村・肇興村でも、最近、漢族資本による高級ホテルが整備されるなど、宿泊施設の整備が進んでおり、こちらでも国内団体ツアー客をはじめ客層が広がっていると思われる。こうした変化は、一方では、従来のバックパッカー客など“探検的な”観光客離れを起こすと考えられるが、量的な面だけ見れば、収容力の限界に至るまでは一般的な観光客数を押し上げる効果が期待できる。

○観光施設

少数民族観光を求めて貴州省を訪れる観光客にとっては、観光に特化したような施設の整備は必ずしも必要でないどころか、本来の風情を損なうものとしてマイナスに作用する場合さえあると考えられる。実際、省文化庁文化処所長・呉正光氏の指導で観光開発が始まった郎徳上寨村など少数民族の観光地では、トイレ、広場、風雨橋、歩道などの他には、あまり積極的な観光施設の整備が行われていない。

その一方で、省都・貴陽市の近郊に立地する紅楓湖旅游村は、模造の伝統建築や宿泊施設、土産物屋をはじめとした人工的な少数民族の集落が整然と整備されたテーマパークとなっている。こちらには、今までのところ、中国人観光客が数多く訪れている。現地旅行社のガイドの話によると、ホンモノ性を求めるフランス人や日本人などの外国人旅行者が紅楓湖旅游村を訪れることはほとんどなく、少数民族が実際に住む山間の村の方に訪れるという。逆に中国人旅行者は、そうした村に対して「汚い、道が悪い、ホテルも悪い」というイメージを持っており、訪れることに抵抗があるようである。そうした中国人旅行者に対しては、紅楓湖旅游村のように貴陽市内の近代的なホテルから高速道路で短時間にアクセスでき、清潔で整然と整備された人工的な観光施設の方が、現時点では、まだ有効だということになる。しかし、紅楓湖旅游村は1991年の整備後、既に15年を経て、施設や設備の劣化が始まり、新たな魅力を付け加える余地も少ないように見受けられるところから、ライフサイクル上では、既に「確立段階」から「停滞段階」に差し掛かっているように思われる。今後は、山間部への道路条件が良くなり、中国の旅行市場が成熟化していくにつれ、中国人旅行者の足もホンモノの少数民族の村へと向かうようになると、観光客離れが生じ「衰退段階」へと進んでいく可能性が予感された。

○景観

前述の紅楓湖旅游村が立地する紅楓湖は、貴州省では数少ない湖沼空間として貴陽市民などの別荘地、リゾート地としての開発が進んでおり、湖の周辺には数多くのリゾート・ホテルや別荘が建ち並んでいる。しかし、それらの整備にあたっては、景観への配慮があまり見られず、開発に伴う景観劣化の1つの例と言える。

一方、少数民族ミャオ族の村である郎徳上寨村、南花村、季刀村、青曼村などでは、観光開発をスタート後に伝統的な木造家屋が連なる村の景観の保全に注意を払っており、新築のコンクリート造りの建物は制限され、規制の制定以前に建てられた建造物には表面に木の板を貼るなどして景観の統一感が損なわれることを防いでいる。周辺の観光開発を選択しなかった村々では、コンクリート造りの建物が目立ち始めているところから、観光地化が景観を守る方向に作用していると考えられる。

ただし、南花村については、州政府などが開発に大きく挺入れていることなどが災いしてか、新築の建物が目立ち、石畳も整然としすぎているなど、真新しく整備しすぎの感がある。観光客に伝統的な踊りを披露する広場は、従来から使用して来た場所ではなく新たに整備されたもので、中心にトーテンポールを立てるなど、民族の伝統からすると違和感がある景観が見られた。現時点ではマジョリティを占める中国人旅行者が、このような整然とした空間を好むとしたらプラスに作用するのかもしれないが、旅行市場の成熟化によっては、こうした景観整備がマイナスに作用するかもしれない。

観光開発に伴う景観整備は、観光魅力を維持・向上させ、観光地の「発展段階」を持続させたり、衰退を防いだりする効果があると考えられるが、コントロールの方向性によっては観光地の魅力にとってマイナスになる可能性を孕んでいると言える。

○文化資源

元黔东南州苗族侗族自治州副州長でミャオ族出身の呉徳海氏によると、ミャオ族の民族文化の主な特徴は、言語、歌、踊り、蘆笙、民族衣装、闘牛、建築に現れていると言う。これらの民族文化は、中国の共産化に始まり、文化大革命や漢民族の同化政策、近年では社会の近代化、情報化などによって大きく損なわれて来ている。また、一般的にも観光化によって、伝統文化が失われたり、俗化したりする傾向がよく指摘される。貴州省においても、伝統的な踊りが演出色を強めて改変されたり、従来踊っていなかった他の地域の踊りのスタイルを取り入れたりといった現象が見られる[曾:1998.4]。我々は民族衣装についても、紅楓湖旅游村にて、デザインを極端に現代風に改変した民族衣装を目撃した。

しかし、その一方で、観光化が伝統文化の存続に繋がる効果を挙げているという面も見られた。呉正光氏は、ミャオ族の村は民族衣装を着て踊りを披露する機会が減少していたが、観光開放することによって、そうした機会が増えた意義が大きいと語った。例えば、伝統的に村の女性は、必ず嫁入り前に民族衣装の晴れ着と銀細工の髪飾りのセッ

トを揃え、それが娘を持った親の義務とも言えるものだったが、近年はその風習が廃れ、郎徳上寨村では観光開放前に村の女性が持っている民族衣装の晴れ着と銀細工の髪飾りのセットが18着しかなかった。しかし、観光開放後、徐々に新たに作られるようになり、現在では120着にも増えていると言う。民族衣装は手作りであるため、裁縫や刺繍の技術も伝承されるようになる。また、他の村で廃れつつある歌や踊りも、観光開放された村に嫁入りすると習わなければならなくなる。男性の若者も、観光開放以降、村に伝わる歌や踊り、蘆笙の演奏などを身につけるようになった。呉正光氏は、社会が近代化することによってある程度文化が変わって行くことには逆らえないが、そうした中でも観光開放により、いくつかの重要な伝統文化を維持・発展させることができると主張している。こうした村では、文化資源が観光客を集め、観光発展が文化資源の維持・伝承に役立つという良循環が成立していると言える。

○特産品（地場産業）

貴州省の少数民族の村は、もともと農業がほとんど唯一の産業というところが多く、観光化した村でも、農業収入が半分以上を占めているところが多いようである。郎徳上寨村では、観光化により農業にも大きなメリットがあると言う。観光客が増えることにより農産物が村内で消費されるようになり、農産物を遠くの市場に運ぶ多大な時間と人件費が節約されるだけでなく、市場で売るよりも村内で観光客向けに加工販売した方が高く売れ、しかもほとんど無駄なく売れる [陳：2006.4]。村内で生産される食材は、ほとんど農薬を使わない緑色健康食品として、観光客から好評を得ている。我々も現地でご馳走になったが、採り立ての新鮮さということもあり、その美味しさは村への良いイメージを構成する一つになりうるものであると感じた。

貴州省の工芸品としては、ろうけつ染め、銀細工、刺繍などが有名であり、観光開放されてからは、それらが土産物として売れるようになり、北京や上海から買い付けに来るほどである。中でもミャオ族の刺繍の質は高く、貴州省を旅した日本人がそれに惚れ込んで、北京でミャオ族の刺繍製品を売るセレクトショップを開店し、また、貴州省内で刺繍学校を設立して、ミャオ族の子供たちへの伝統技術の伝承を図るほどである [佐藤：2006]。刺繍自体は産業と言えるほどの規模ではないと思われるが、ミャオ族の刺繍が内外のマスコミで紹介されるようになり、特産品が観光地のイメージを押し上げ、それによって集まった観光客によって特産品が買われ、さらに評価が広まっていくという良循環がここでも成立しているものと思われる。ただし、こうした工芸品が高く売れることがわかり始めたため、今後、村人が農作業に費やす時間が減少するのではないかと懸念もある [陳：2006]。

○ホスピタリティ

一般的に観光開発の初期においては、外部の異人たる旅行者に対する警戒心が徐々に

解かれ、旅行者に対応するスキルが身についてくにつれ、ホスピタリティは上昇し、その後、観光地化が進展して旅行者に慣れるようになるにつれて、ホスト側に商業主義やルーチン作業的な意識が広まって、旅行者から見たホスピタリティの印象は低下していく傾向があるものと考えられる。

ただし、元々住民が旅人に対してもてなす習慣を持っている地域では、最初の警戒段階を素早く飛ばして、ホスピタリティが最も高い段階からスタートすることもあり得る。今回、我々が視察した季刀村は、既に近辺の村が観光化に成功したこともあり、そのケースに当てはまると考えられる。季刀村は、2004 年の観光開放からわずか 2 年しか経過していないにもかかわらず、少数の旅行者グループに対しても村人総出で出迎え、ほぼ全員が心からと思える笑顔で挨拶を交わしてきた。しかし、同じ地域の同じミャオ族の村である南花村、郎徳上寨村では、観光開放からそれぞれ 10 年、20 年が経過しており、当然のことながら渾身の笑顔での出迎えというわけにはいかない。いずれの村も、季刀村から数キロしか離れていないだけに、印象的だった。また、現地ガイドによると、こうした村ではモノ売りがしつこくなってきており、それによって村の印象が悪くなっていると言う。

我々は、プイ族の鎮山村やトン族の肇興村でも同様の傾向を経験しており、こうしたホスピタリティの低下は、観光地の魅力低下の要素にもなると思われる。しかし、観光受け入れの常態化や収入の増加に伴い、素朴さや歓迎心が薄らぎ経済観念が発達することを咎めることは難しい。住民の心性に訴えるばかりではなく、経済的あるいは名誉的な報酬に裏付けられたホスピタリティ向上へのモチベーションを高める仕組みが必要と思われる。

観光客側、送客側にも大きな問題がある。長期間、郎徳上寨村などを中心に貴州省に滞在して研究活動をしていた法政大学教授曾士才氏によると、旅行社側に「連れてきてやってる」「見せてやってる」という意識があり、都市から来た漢族の客にも少数民族に対して上から見下ろすという態度が見られるようである。また、ガイドがツアー客に対して、地元の習慣や文化を説明しないために、少数民族の文化に対して敬意を払わず、マナーや礼儀を守らないこともあり、実際、我々も、そのようなシーンを目にすることがあった。そうしたケースが続けば、住民側のホスピタリティが低下するどころか、村内で観光受け入れの是非も問われることになるであろう。

○認知度・ブランド力

貴州省は、1985 年、呉正光氏が中心となって北京での展示イベント「貴州 侗族建築及び風情展覧」を実施してトン族の鼓楼や風雨橋などの建築文化を紹介したことを皮切りに、北京や上海などの国内大都市や日本などの海外において少数民族文化を紹介するイベントなどを実施したり、宣伝・プロモーション活動を実施してきた。近年、海南省で観光振興の経験を持つ王富玉氏が貴州省委員会副書記として赴任後は、「多彩貴州」

のキャッチコピーを掲げるなど宣伝・広告には特に力を入れており、爆発的な観光客数の増加にも繋がっている。現地ガイドによると、中国人による認識度が高いのは、東洋一の滝である黄果樹瀑布や龍宮鍾乳洞および毛沢東がリーダーとしての地位を確立する会議を開いた遵義市であり、中国人ツアー客が貴州省内で巡るのは、省都・貴陽とそれらの観光地だけの場合が大半のようである。それらと比べるとはるかに認知度が低い少数民族の村に行く中国人旅行者はまだまだ少数派であり、認知度・ブランド力が観光地の入込客数に与える影響は非常に大きいと言える。

○市場トレンド・競合地／連携地

現在のところ、「民族風情」が貴州省の観光イメージの一つとなっはいるが、ほとんどの中国人旅行者は少数民族の村よりも前述の有名観光地を巡る旅行をしている。そのため、同じように少数民族観光が大きな柱となっている隣接する雲南省や広西チワン族自治区と貴州省は競合関係にあるとは言えず、むしろ隣り合う省を一緒に周遊する中国人旅行者は多い。この傾向は、高速道路などの交通条件の改善により、さらに強まるものと思われ、今後しばらくは、貴州省と周辺地域の観光地は競合関係ではなく、連携的な関係が続くものと思われる。

一方、貴州省内の少数民族の村同士の関係に目を向けると、郎徳上寨村の成功を見て観光開発に着手する村が増えており、村同士の競合関係が発生していると思われる。ただし、こうした競合関係は、村同士の切磋琢磨を促したり、特定の村に観光客が集中するのを防ぐ効果もあるため、必ずしもマイナスに作用するとは限らない。

ミャオ族の村では、観光客を歓迎する歌や踊りの儀式を行う村の広場の大きさは何百人も収容できるような大きさではなく、儀式を行う回数も1日2回が原則である。現在、爆発的に増えている国内観光客に対応するために、それ以上の頻度で行えば、今は農業と両立する生活を維持している村人のライフスタイルが、今後、大きく崩れたり、現在、観光客を迎える場を取り仕切っているシャーマンが、本来の神聖な伝統儀式を執り行うことに支障を来すと考えられる。あるいは、押し寄せる観光客に対応するために今は村にはほとんどいない観光プロパーが誕生し、“観光村”的な色調がより強く出てくる可能性もある。しかし、少数民族の村同士が競合し、特定の村への観光客数の集中が抑えられれば、収容力の限界を超えて観光客を受け入れて観光魅力が損耗するようなことを防ぎ、観光地としての持続可能性に繋がるのではないかと思われる。

○観光地の魅力の背景にある地域調和

今回の調査では、「地域調和」ということが、以上に挙げたような観光地の魅力を構成する要素の影で大きな影響を与えていると感じられた。特に地域内で統一感が必要な景観については、村内でルールを作ったり規制をかけたりするためには村民の総意が必要である。また、ホスピタリティに関しても、観光関係者とそれ以外の者の間に観光に

対する温度差が大きければ、旅行者はその村のホスピタリティに不自然さやわざとらしさを感じるであろう。

また、観光開放当初は表面化しなくても、観光化の進展に伴い、交通渋滞やゴミ、トイレの問題などで観光受益者とそれ以外の者に対立や溝が生じれば、村が一致団結して観光振興に取り組むということは難しくなるであろう。そうした現象を、筒井は「観光疲れ」と称している〔筒井：2005〕。筒井は、湯布院（旧湯布院町。現在は由布市の一部）を例に挙げ、重要な観光資源となっている湯布院の田園風景を維持している農民、および乱開発の防止や景観条例の制定などに大きな役割を果たしてきた町当局と、観光受益者である旅館経営者や土産物屋などとの間に利害関係の不一致が生じ、市町村合併問題などの町内対立に発展していることを指摘している。それは、それまで地域が一致団結して観光振興に取り組み、経済優先の乱開発を防いで、温泉の湯煙と田園風景が調和した魅力を形成してきた湯布院にとっての危機を意味している。

そうした点で、郎徳上寨村など観光開発に成功したミャオ族の村では、地域一体となった取り組みが行えるようないくつかの仕組みが働いていた。その一つが農業と観光を両立させた生活の維持である。原則として村民全員が農民でありかつ観光関係者であるため（正確には希望者全員が観光に参加できる仕組みだが、観光による現金収入が大きいため村民の大半が観光に参加している）、湯布院のように観光業者と農民との分化が生じていない。

もう一つの仕組みが、人民公社時代の仕組みを活かした「工分（コンフン）制度」である。工分制度とは、コミュニティ内における点数査定制度ともいえるべきものであり、リーダーが各労働者ごとに働いた時間や内容によって毎日、点数を付けて計算し、それに応じた給与を支払う仕組みである。現在の観光利益の配分方法は厳密には以前の工分制度とは違うようだが、まず、村が一括して歓迎儀式上演料として観光客から1グループあたり500元を徴収する。その歓迎儀式に参加した村民には、民族衣装着用、盛装着用、踊り参加、蘆笙演奏、歌唱などといった役割ごとに、三角、四角、丸などの形の点数が書かれた板が渡される。そして、1ヶ月ごとに、観光総収入から蘆笙の修繕費や管理費などを村の経費として10～20%差し引いた後、各人の累積点数に応じて現金を分配する仕組みである。

郎徳上寨の観光開発を始めた当時、現場で指揮をした村の元共産党書記陳正涛氏も、このような村民全員参加の原則と工分制度により、村民の間での収入の分け方が公平であったことが、大きな成功要因だったと振り返っている。その仕組みにより郎徳上寨村の観光開発は成功し、大きな発展の推進力となったと思われるが、同時に、湯布院のように成熟化した観光地が抱える地域不調和とそれによる将来の衰退の芽を、既に先取りして摘んでいるとも考えられる。

貴州省のミャオ族の他の村では、郎徳上寨村に倣い、同様の制度を導入しているところが多いようであるが、今回の視察では、他の少数民族で同様の制度を導入しているか

どうかはわからなかった。例えば、貴陽市の西の老漢族（明時代に貴州省に移住した漢族の子孫）の村である天龍屯堡古鎮では、地元出身者の民間資本による天龍旅游公司という会社が設立され、村内を案内するガイドや地劇と呼ばれる伝統演劇の出演者に給与を支払っており、村民全員が観光に参加しているわけではない。

また、トン族の中心的な観光地である肇興村では、前述のように外部の漢族資本による高級ホテルが整備されているだけでなく、同じ資本により、伝統的な歌と踊りのショーを上演する舞踏団が組織されており、その団員の3割は村外の周辺地域出身者である。つまり、ここでも郎徳上寨村のように観光に村民が全員参加するわけではない。そればかりか、外部資本が入った上に、域外からの労働者まで導入されているのである。また、彼らは農業などと兼業しているわけではなく、漢族資本の会社に所属する従業員という立場であり、歌や踊りを専門の仕事として行っている。

そのショー自体は、2年間の訓練を経て出演が許され、日々練習を続けているだけあって、賞賛に値する非常に質が高いパフォーマンスを示していた。また、周辺地域のものも含めて、伝統の歌や踊りをよく研究し、質を高める努力をしており、伝統文化の維持・発展という意味でも大きな意義を有していると言える。しかし、ここでは郎徳上寨村には存在しない観光プロパーが歴然と存在するわけである。村の人口が郎徳上寨が800人弱なのに比べ、天龍屯堡古鎮は6,000人、肇興が5,000人と規模が大きく違うことも、こうした観光に取り組む体制の違いの背景としてはあるが、これらの村では将来的に観光受益者とそれ以外の温度差というものが生じ、何らかのマイナス要因となる可能性はある。

〇おわりに

今回の視察調査では、既存の論文や文献などにより傍証が得られる部分もあるが、基本的には現場を見たり、関係者のヒアリングで聞いたりして得た印象をベースに議論や検討を行ったため、正確性が必ずしも確保されていない点は否めない。しかし、観光地の盛衰に関係する観光魅力のコントロールという観点で大まかに分析してみた結果、持続可能な観光地の仕組みづくりの一つの可能性を、貴州省の少数民族の村に見た気がした。

特に郎徳上寨村などミャオ族の村では、多くの成熟化した観光地が抱える地域不調和という問題を解決していると思われる。

ただし、収容力の限界という点から見ると、郎徳上寨村は観光地ライフサイクルの上で既に「確立段階」にあり、成熟した「停滞段階」をどう迎え、「衰退段階」を避けるためにどうソフトランディングし、あるいは次のステップを創造するのかという課題を、他の貴州省内の観光地に先立って解決し、新たな観光地ライフサイクルのシナリオを描くべき位置にあるのかもしれない。

その解決策の一つの糸口として考えられるのは、ミャオ族が持つ観光資源は、形がな

い文化資源をメインとしている点である。これらの文化資源は、特定の村に集中して存在しているものではなく、他の村でも担うことができ、周辺地域が一体となって互いに競合しつつ共存するという関係が可能であると思われる。そのためには、今後、観光客がさらに増えた場合（おそらく貴州省への観光客は今後も大幅に増加するであろう）、すべての観光客を自分の村に囲い込むという姿勢を避けるべきであろう。今のところは、農業と観光の両立のために観光客の歓迎儀式を1日2回に限っていることが、受け入れ人数を抑制することにもなっている。

「全員参加」「農業と観光の両立」「工分制度」といった原則や仕組みは、収容限界を超えて観光客を受け入れる危険と、観光受益者とそれ以外の者による村内対立の危険の両方を避け、自らの観光魅力の損耗を回避するように働いていると思われる。バトラーの観光地ライフサイクル・モデルに当てはめてみるならば、将来の「停滞段階」の次は「再生段階」に入ることが期待でき、しかも、バトラーが再生段階の「以前と異なる魅力や未利用の自然資源の活用による観光地の再生」として挙げたアトランティックシティや、「絶えずアトラクションを追加」することで再生を繰り返すディズニーランドのようなタイプの観光地ではなく、「永続的な魅力を持つ」ナイアガラのようなタイプの観光地 [Butler: 1980] となり得る可能性がある。しかも、それはナイアガラが持っているような資源そのものの特徴によるのではなく、地域が自ら創り上げた仕組みによってそのような持続的観光地となるのであり、本質的にはより大きな意義を持ちうるのかもしれない。

※ 本稿は財団法人日本交通公社 2006 年度自主研究として実施されたコミュニティ・ベース・ツーリズムの研究（中国・貴州省調査）報告書に執筆した原稿をもとにしたものである。

参考文献

Butler, R.W.

1980 The concept of tourism area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer* 24 (1), 5-12

2002 「観光地の発展周期に関する考察：観光資源管理のための一視点」『立教大学観光学部紀要』4, 98-103, 毛利公孝・石井昭夫訳。

Hovinen, Gary R.

2000 「観光地域サイクル論のランカスター郡への適用」『社会学部論叢』10(2), 101-110, 中崎茂訳。

Kovács Dezső

1997 "Phases of rural/village tourism development (An interpretation of Butler's tourist area life cycle concept for rural tourism)" 'Actors of

the European Countryside' - Seminar 1-5 October 1997 Erdőtarcsa, Hungary. < <http://miao.gau.hu/miao/60/fanclub/mfc02/1.doc> > (accessed 2006-11-3).

石井昭夫

- 2002 「観光地発展段階論の系譜－新時代の観光開発と観光マーケティングのための基礎理論を求めて－」『立教大学観光学部紀要』4, 52-56。

石川真澄

- 2001 「観光地のライフサイクルと持続可能性」多方一成・田渕幸親編著『現代社会とツーリズム』pp.99-120, 神奈川：東海大学出版会。

佐藤雅彦・みずよ

- 2006 「中国少数民族苗族の世界」(online).
< http://www.geocities.jp/miao_masamizu/asiato.htm > (accessed 2006-11-3).

曾士才

- 1998 「民族観光による村おこし－中国貴州ミャオ族地区の事例研究－」『旅の文化研究所研究報告』6, 57-67。
1998 「中国のエスニック・ツーリズム－少数民族の若者たちと民族文化－」『中国21』3, 43-68。
2001 「中国における民族観光の創出：貴州省の事例から」『民族学研究』66(1), 87-105。
2002 「中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造』pp.32-54, 東京：弘文堂。
2005 「ミャオ 交差する民族エリートたちの思いと願い」綾部恒雄監修, 末成道男編『講座 世界の先住民族－ファースト・ピープルズの現在〈01〉東アジア』pp.244-260, 東京：明石書店。

陳晶

- 2004 「中国における観光の新しい動向－貴州省少数民族の観光を中心に」『社会学論叢』150, 23-42。
2005 「中国の黔东南苗族侗族自治州における観光調査－観光村と普通の村を比較して」『社会学論叢』153, 25-44。
2006 「観光開発が少数民族観光村に与える影響について」ツーリズム学会編集委員会編『新ツーリズム学言論－自由時間社会の豊かさの質とは』pp.89-107, 東京：東信堂。

筒井隆志

- 2005 「観光地のライフサイクルに関する試論－大分県湯布院町に見る観光地衰退の萌芽」『経済学年誌』48, 28-45。